

【養豚経営】養豚における飼料高騰対策関連技術

畜産酪農研究センター 芳賀分場 養豚研究室

養豚研究室における取組の中で、飼料高騰対策関連技術としての効果が考えられるテーマについて紹介します。

1 「豚人工授精用液状精液の利用技術の確立」

養豚経営における人工授精技術の導入は、①種雄豚の頭数削減で飼育費を抑え、生産費の削減②優秀な雄豚の効率的利用による高品質肉豚の安定生産③衛生管理面でのリスクを抑え、伝染病の発生を未然に防ぐなどのメリットがあり、飼料高騰時においても経営コストの削減の図る上で、積極的に活用すべき技術の一つといえます。



養豚研究室では、液状精液を利用する現状の人工授精技術の、県内における実態調査を実施しており、普及上の問題点を明確化する作業を行っています。今後は、豚液状精液の希釈・保存方法等の検討やマニュアル作成を通じて、技術の定着を目指します。

また、豚人工授精に関しては、ランドレース、大ヨークシャー、デュロック各品種の優良種雄豚を繋養し、主に種豚の改良を目的とする県内養豚農家への液状精液配布や、毎年研修会を開催し（今年度は受付終了）、採精、希釈及び注入技術の習得や情報の提供等を行っていますので、詳細を知りたい方は芳賀分場まで連絡願います。

2 「肥育豚における飼料用米給与割合の検討」

ほとんどを輸入に頼る豚のエサを、飼料自給率向上の観点から、国の施策によって生産が拡大している飼料用米を積極的に利用していくことが考えられており、そのために必要となる給与技術を確立することが求められています。そこで、平成24年度は粉碎した飼料用米の混合割合を50%と75%に設定し、養分要求量を肥育後期用飼料と合わせ有効性を調査しました。その結果、混合割合75%



でも一般の肥育後期用配合飼料と比べ遜色のない肥育成績でした。また、給与期間中の飼料費は、市販飼料を44.4円/kg、飼料用米を試験使用時の単価28.0円/kg（センター購入価格、送料と人件費は含まず）、飼料用米混合用配合飼料を49.9円/kgとして計算したところ、50%混合区で1頭あたり916円、75%混合区で1頭あたり1,676円のマイナスという結果を得ました。ただし、飼料用米の流通は契約栽培が基本となっており、市販配合飼料とは取扱いが異なるため利用が難しい面があること、また、豚への安定給与には、粉碎のように何らかの加工が必要であることなど課題も多くあり、実際の利用にあたってはこれらに留意する必要があります。